を指すように読み取れる。「商人イデオロギー」も，やはり著者の意味するところが明確ではない。これらを徳教を特徴づける重要な要素とするならば，著者の定義を示す必要があったのではないか。著者はまた，潮州人について，「相互の結合と組織的連携をもっとも重視する」とともに「教育の推進，エスニック文化の継承を重視することで知られる」とする（p.102）。これらは，著者の実感でもあろうが，他の方言集団にもある程度当てはまることではないか。違いがあるのならば，その根拠やいかにして生じたのかという考察がほしかった。

このほか，序章で目的として挙げられた扶鸞とスピリチュアリティに関する分析が，終章でまとめられているのみなのは，少々残念に思われる。著者が「あとがき」で述べている通り，扶鸞には科学では証明できない魅力がある。著者の徳教研究がさらに進み，著者が目指す通り，移民研究および現代におけるスピリチュアリティ研究にまで成果が広がることを期待したい。

（玉置充子・拓殖大学海外事情研究所）

言及文献

志賀市子．2003．『中国のこっくりさん――扶鸞信仰と華人社会』大修館書店．

樫永真佐夫．『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』（叢書　知られざるアジアの言語文化5）東京：雄山閣，2011, 163p.

黒タイの年代記『タイ・プー・サック（父祖の征戦物語）』を紹介・翻訳した本書は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の叢書シリーズ「知られざるアジアの言語文化」の第5冊目である。本叢書は，自らの国家をもたず，近代領域国家の周縁に置かれている少数民族が自身の言葉で語った口頭伝承や文献を和訳して紹介しようとするシリーズである。但し，アジアと言っても現在刊行されているものは，中国雲南から大陸東南アジア北部にかけての，近年，独自の歴史・文化を持つ「タイ（シャン）文化圏」として知られるようになってきた地域のものである。本書は，その中でも特に研究蓄積が少なかった黒タイの年代記を扱った貴重な業績である。著者は，人類学者として黒タイ村落において長期の滞在型臨地調査を行う一方，黒タイ出身の研究者カム・チョンに長年師事して黒タイ文書の文献研究を進め，多くの文献の翻訳・注釈などを発表してきた。評者も，黒タイが居住するベトナム西北地方を対象に歴史研究を行っており，ベトナム留学中には同じくカム・チョンの下で学んだ言わば弟弟子であるが，先生のカム・チョンをはじめ，調査先の黒タイ村落などで，常々著者の黒タイ語の言語能力の高さと黒タイに関する該博な知識に対する評判を聞くにつれ，それに比しての自分の非才に恥じ入るばかりであった。このような不肖の弟弟子であり，日頃よりその学恩を受けている評者が，著者の作品を評するのは甚だ僭越とは知りつつ，研究対象を同じくしながら歴史学という異なるディシプリンに身を置く人間として，あえて筆を執らせていただく。

本書は，解説，年代記テクスト日本語訳・注，コラムの3つの部分からなっている。年代記の内容紹介を兼ねて解説部分を紹介すると，まず「黒タイの文化的特徴」「村落生活の現状」（「　」内は節タイトル。以下同）で，著者の臨地調査の経験をふまえ，黒タイ社会の基本的なイメージがつかめるように配慮された記述がなされる。続く「文字文化」においては，黒タイ文字文書及び識字についての説明を通して黒タイ社会と文字との関わりの概観が示され，続く「年代記」で，黒タイ社会において継承されている各種年代記『クアム・トー・ムオン』『クアム・ファイン・ムオン』『タイ・プー・サック』の文献学的情報が説明され，同じく黒タイの首領達の事績を記した年代記であっても，内容のみならず，記述スタイルや用途が異なっており，『タイ・プー・サック』は数年に一度催される大祭礼で役職者達により唱歌される韻文作品であることが示される。最後の「カム・チョン版タイ・プー・サック」では，『タイ・プー・サック』の写本テクストの伝承者であり，著者の師でもあるカム・チョンの生涯及び本書の底本となる写本テクストの内容，形式などが述べられ，『クアム・トー・ムオン』との記述内容の比較から，相

補関係にある2つの年代記は，各地に残る黒タイ首領に関する種々の伝承を下敷きに成立したものであると推測されている。

訳・注部分については，まえがきで書かれているように，全体の7分の1しか訳されていない。これは，著者が『タイ・プー・サック』の読み方を学んでいたカム・チョンが2007年12月に亡くなり，その解釈を受け継ぐことができなくなってしまったためである。本書の目的は，カム・チョンがついに自身で公開することができなかった『タイ・プー・サック』の解釈を一部であれ世に残すことにあるとする。とはいえ，詳細な解説部分，そして訳注を補う形で本書後半に配された関連コラムが加わることで，著者の手になる黒タイ民族誌として読むことも可能である。また，古文書に用いられる黒タイ文字は，外形上区別のつかない文字が多く，声調記号も付されていないなど，その解読は困難を極める上，主語が明示されない，意味の切れ目が不明確といった特徴を持つ年代記の記述スタイルが読解をさらに難しくしている。その中でも，比喩・諧謔表現に満ちた修辞的難解さゆえ，黒タイの知識人ですら忌避する傾向にあるという『タイ・プー・サック』がベトナム語以外の外国語に翻訳されるのは，評者が知るかぎり世界初であり，[1] この韻文作品を日本語に訳出するという難業を成し遂げた点は高く評価されよう。

もう1つの本書の特長であり，評価すべきは，本書にちりばめられた約120点の写真（全163ページ中）の存在である（そのほとんどは著者自身が撮影）。それ自体が貴重な資料であると同時に，例えば，「籠にぎゅうぎゅうのニワトリが，ことごとく霊になる」（p.57）という表現があれば，現在黒タイの村落で用いられている「ニワトリ用の籠」の写真が載せられる，という具合で，読者が年代記の世界に容易に入ってゆくことができる仕掛けとなっている。テクストを生み出し，現代まで継承してきた社会の姿を示そうとするこうした著者の姿勢は，「村落生活の現状」など現在の黒タイ社会の姿に関する記述やテクストの伝承者のライフヒストリーに紙幅を割いている点とともに，モノとしてのテクストに注目し，テクストを生み出し，継承する社会との関わりを射程に入れようとする近年のテクスト論の動向とも呼応するものである。[2]

一方で，問題と感じられる点もないわけではない。まず，やや細かい点になるが，本書20ページの黒タイ首領の肖像写真に「20世紀初頭までの黒タイ首領に関しては，中国の皇帝風の衣装を着た肖像写真がしばしば残っている」というキャプションがついている。しかし，両角を横に長く伸ばした円幞頭と呼ばれる被り物が特徴的なこの装束は，阮朝ベトナム文官の礼装であり（cf.『大南会典事例』巻78礼部，冠服），植民統治下でも継襲された阮朝行政システムの中における官人としての黒タイ首領の一面を表している写真である。キャプションは，それ自体が，読者が写真から受け取るイメージを左右する重要なテクストであるので，より正確な記述が求められよう。また，注釈において，ロー・ヌア（ヌアは黒タイ語で「上」もしくは「北」の意）という地名が，扇状地上流部かムオン・ロー北部か不明とあるが（p.51，注71），ベトナム漢文史料を見れば，ロー・ヌアは北ではなく上流部を指すことは明らかである［岡田2012: 11–12］。こうした地名比定などには，ベトナム・中国・ラオスなどの外部史料が力を発揮することも多く，それらへの参照があれば，より正確な訳注が作られたはずである。

以上にあげたのは，些末な指摘であるが，一方，文献資料を用いて研究する人間として大きな違和感を覚えたのが次に述べる著者とテクストとの「距離感」である。まず，翻訳という行為の時点で著者の解釈が介在するのであるから，テクストの原文がないことが惜しまれる。基本的に個人間で

1) 黒タイ年代記として比較的名が知られ，研究者に利用されてきた『クアム・トー・ムオン』についても，タイ系言語話者集団の起源に関心を持つ歴史言語学者達により海外に紹介されてきたのは，黒タイの始祖伝説を記した冒頭部分のみであったが，著者は，すでに全文の訳注を公刊している［樫永2003］。

2) モノとしてのテクストに関わる全ての行為を研究対象としようとする，こうした新しいテクスト論については，著者も執筆者として名を連ねている齋藤［2009］を参照されたい。

継承される黒タイ文字写本は，そのアクセスは非常に難しく，本書が底本としているのも，カム・チョン自身が手写した私蔵本である。底本の原文を参照することができないのは学術的価値を大きく損なうことを意味しよう。もっとも，この点は，テクストの内容紹介を通じて広く一般読者に少数民族社会の世界観を伝えることに主眼を置く叢書シリーズ全体の編集方針によるもので，無いものねだりは承知の上であるが，あえて指摘しておきたい。編集企画面について付言すれば，テクストの世界観を伝えることを目的とするならば，ネイティブ・スピーカーがテクストを朗誦した音声ファイルをCDあるいはオンライン・リソースとして提供するなどの工夫はあってよいのではないかと思われる。とりわけ『タイ・プー・サック』のような韻文テクストの場合，文字情報のみならず，独特の韻律と節回しによる音声的情報が内在されているのであり，テクストの音声的要素が読者に伝わらない点は残念である。もう一点，著者とテクストとの距離感に関して，より大きな違和感を感じさせるのは，注釈部分である。圧倒的な量で付された側注のおかげで，『タイ・プー・サック』の難解な文章を前にしても読者は立ち往生せずにすむわけであるが，その注解釈の主体が，著者であるのか，著者が教えを受けたカム・チョンなのかが明瞭でないのである。「カム・チョンから受け継いだ筆者の理解を明示し，読者の理解を補うために詳細な訳注をつけた」(p.33) とあり，解釈主体を明示していない注の多くの部分はカム・チョンの解釈に拠っていると思われるが，一方で「カム・チョンは／カム・チョンによれば～という」といったカム・チョンの解釈を相対化して記述している箇所や，著者自身の解釈と推測される記述も混在している。一般的な文献学の作法としては，注解釈の主体を明示する工夫が必要であったのではないだろうか。また，本書解説部分 (p.33) で言及されている『タイ・プー・サック』のヴオン・チュンのベトナム語訳について，その解釈はカム・チョンとは異なる部分も多く，本書訳注においても他の解釈の可能性としての言及があってもよかったように思われる。

とはいえ，上に問題点としてあげた点についても，本書が伝承者カシナガ・マサオによって作られた新しい黒タイ年代記のテクストと考えれば，意味のない指摘であるのかもしれない。そもそも黒タイ文字テクストは，口承を含めた黒タイ社会に伝わる各種文芸と相互参照の関係にあり (p.17)，テクストの内容自体も書写を繰り返す過程で，変容を蒙るだけでなく，その継承に際しては，読み方の暗誦，意味解釈の伝授を伴うものである。そして，口授により伝承者間で継承される解釈は，各伝承者の独自の研究，見識により，追加，修正されてゆく。著者が解釈を習ったカム・チョンの知識の中には「あまたの伝承者の知識と，熱情，感傷の血潮がとけこんでいたはず」(p.v) であり，本来文字化されない知識の総体から生まれる解釈は，渾然一体となって，もはや解釈主体を分かつことはできない。ここで注意しなければならないのは，各々伝承者たちは恣意的な解釈を積み重ねてきたわけではない。伝承者達を結びつけ，解釈を拘束するのは，口授により直接伝達される知識だけではなく，同じ社会を生きた経験の共有である。著者は，長年にわたり，カム・チョンから文書読解の指導を受けただけでなく，黒タイの村落において長期の滞在調査を行い，かつてカム・チョンが，古文書解釈のため，各地の知識人を訪ね，「西北地方の道という道，村という村を徒歩で行き尽くした」(p.24) 後を追うかのように，各地の黒タイ村落を駆け回った。外国人研究者としては，おそらくもっとも多くの道を踏破し，もっとも長い時間を同地方で過ごしたであろう著者にして，はじめてこのテクストの伝承者となりえたのである。黒タイのテクストは伝承者を離れては存在しえない。そして，伝承者の手により新たに写本が作られれば，古い写本はその役割を終えるのである。黒タイ文字の写本に古い年代を持つものが残っていないのは，書写媒体の耐久性によるだけでなく，こうしたテクスト継承のあり方に由来するものであろう。著者はまえがきにおいて，本書の上梓を，社会との生きた関わりを失ってしまっている年代記への供養といえるかもしれない (p.iv)，と述べているが，いや，この年代記テクストは新しい伝承者を得て蘇ったというべきであろう。まずは，貴重な黒タイのテクストが遠い日本

の地で新たな生を得たことを喜び，著者の黒タイ文献研究のさらなる展開を期待したい。

（岡田雅志・大阪大学大学院文学研究科）

参考文献

樫永真佐夫．2003.「（注釈）クアム・トー・ムオン――ムオン・ムオイの黒タイ年代記」『ベトナムの社会と文化』4: 163–243.

岡田雅志．2012.「タイ族ムオン構造再考――18–19世紀前半のベトナム，ムオン・ロー盆地社会の視点から」『東南アジア研究』50(1): 3–38.

齋藤　晃（編）．2009.『テクストと人文学――知の土台を解剖する』東京：人文書院.

床呂郁哉；西井凉子；福島康博（編）．『東南アジアのイスラーム』東京外国語大学出版会，2012, 414p.

東南アジアの文化や社会，そして政治を理解するうえで，イスラームに着目することの重要性は大きくなっている。東南アジアにおいて，イスラームの宗教的営為を重視する生活習慣は，年々広がりをみせている。ヴェールを着用する女性の割合は増加し，イスラーム関連書籍の市場は拡大の一途を辿っている。また，イスラーム金融が最も盛んな地域のひとつが，東南アジアである。さらに，イスラーム世界において最大のムスリム人口を擁するインドネシアでは，バリ島で爆弾テロ事件が2回発生し，2009年には，首都ジャカルタでも外資系ホテルで爆弾事件が起きた。いずれもイスラーム過激派による犯行とされ，9.11同時多発テロ以降，国際社会の大きな注目を集めている。また，フィリピン南部では，少数派のムスリムによって分離独立を求める武装闘争が続いている。以上のように，東南アジアにおいて，イスラーム的規範が社会の広範囲に浸透し，政治的，経済的に重要な意味を持つようになった。言い換えるなら，現代の東南アジアを語る上で，イスラームは看過できない重要な要素となっている。

東南アジアのイスラーム研究の嚆矢となったのは，紛れもなくクリフォード・ギアツの研究であろう［Geertz 1960］。その後，各国社会における個別の事例研究が蓄積され，それと同時に，東南アジア全体のイスラームを扱った研究も上梓されるようになった。たとえば，初学者に向けた概論［Hooker 1983］や，9.11後の東南アジアにおけるイスラームの変容を，政治と社会の双方から論じた論集［K.S. Nathan and Mohammad 2005］，そして，東南アジアのイスラームが中東地域との関連性に基づいて発展してきた点を明らかにした論集［Tagliacozzo 2009］などがあげられる。

本書は，こうした研究蓄積を踏まえ，東南アジアのイスラーム，そしてムスリムによる多様な宗教的営みを包括的に描き出し，各国社会を構成するうえで不可欠な要素のひとつとして位置付けることを試みた論集である。現地調査にもとづいた人類学的研究，歴史学や政治学など，異なる研究手法をとる執筆陣が，それぞれの観点から東南アジアのイスラームについてアプローチしたのは，邦書としては本書が初めてである。その点で，研究者や大学院生に加えて，学部生や駐在員などの企業関係者を広く対象読者とした本書は，極めて画期的試みとして位置づけることができるだろう。

以下で，本書の内容について簡潔に紹介していこう。

本書は，5部16編の論文から構成される。第I部の「イスラームと知の伝達」では，イスラームの知を中東地域から東南アジアに伝える役割を担う留学と，宗教書の流通について3論文が収められている。第1章では，エジプトのアズハル大学へ留学したフィリピン・マラナオ社会のムスリムを分析した。マラナオ社会のムスリムにとって留学は，達成すべき目標であると同時に，留学先では広範な人的ネットワークが構築されていることが明らかにされた。第2章では，インドネシアからイエメン・ハドラマウト地方への留学生が増加している点に焦点をあて，留学がイエメンからの移民の子孫に限定されない，より開かれたものとして人々に選択されていることが明らかにされた。第3章では，19世紀から20世紀の島嶼部において，宗教書であるキターブの流通が当該社会のイスラーム化に影響を与えていることが浮き彫りにさ